

4

取組の成果

居場所サロン参加者の推移

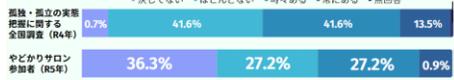
- ◆ 回数当たりの居場所の参加者は、開始時の2023年6月には8.5人であった。8月に少し落ち込んだものの、その後はゆるやかに増加を重ね、2024年1月には最高人数の11.75人を記録した。



居場所サロン参加者アンケート結果

- ◆ やどかりの居場所サロン参加者を対象に行ったアンケートでは、令和4年度の内閣官房の調査と比較し、孤独を感じている人の割合は低い結果となった。
- ◆ 回答者全員が「居場所に参加してよかった」とアンケートに答えた。

あなたは、自分とは他人たちから孤立していると感じることがありますか。



あなたはどの程度、孤独であると感じるときがありますか



役割の獲得

- ◆ 6月～1月のやどかり交民館で、10月・1月に当事者主体のイベントが開催された。2つのイベントは全て当事者が発案・企画。実施も全て当事者それぞれが役割を担った。

互助の促進

- ◆ 孤独死ゼロアクションオープンチャットにおいて、個別具体的な互助の事例がいくつも生まれた（写真③：エアコンが壊れた参加者を別の参加者が修理しに行った事例）。

連携による効果

- ◆ 伊集院こどもふれ愛食堂と連携したことにより、10月に当事者主体で行われた『カレーを食べよう会』で枝豆の提供があり、食糧支援も行うことができた。
- ◆ 特定非営利活動法人かごしまホームレス生活者支えあう会と連携したことにより、当法人の利用者ではない方が2名やどかり交民館に参加されるようになった。



↑ (写真③) LINEオープンチャットでの互助の事例

5

取組において工夫した点

取り組みにおいて直面した課題

- ◆ 6月に開始した孤独死ゼロアクションオープンチャットでは、9月に2度トラブルが発生し4名がLINEを退会。人数が多くなったこと、投稿が活発化したこと、意見の食い違いが原因と考えられる。
- ◆ 11月には居場所参加者内でのトラブルが発生し双方が来なくなる事態が発生。

解決策

- ◆ トラブルでLINEを退会した4名うち、2名はすぐに再度LINEへ参加している。後の2名については、法人とは良好な関係を継続でき、11月にはどちらも再度LINE参加につながった。法人において、『ひとつ切れても、つながりが切れないつながりの網をめぐらす』環境を構築することが重要。
- ◆ トラブル後、やどかり交民館参加者でチャットのルールを協議し、11月にはルールを定めた。以降はトラブルになりそうになっても当事者が主体的に解決できた。
- ◆ 居場所のトラブルについては、相互の意見を当事者グループワークで議論する場を設けた。
- ◆ これまで孤独孤立に陥っていた方が『相互行為』が行われる居場所に参加した場合、必ず何らかのトラブルが起こる。しかし「トラブルを避けるために当事者どうしをつなげない」ではなく、参加者には誰にでも社会に参加しトラブルを自ら解決できる能力があるという前提（社会参加における能力存在推定）に支援者が立つことが必要である。

6

今後の展開

今後の課題

- ・参加者全員に互助における役割が生まれているか？
- ・孤立している当事者にアウトリーチが届いているか？再孤立化を防止できているか？
- ・無償ボランティア、有償ボランティア、有給の仕事の線引きをどうするか？

取組の継続方法

- ・本取組を来年度以降も継続するために当事者主体の寄付募集活動を始める。
- ・一つ切れても全部は切れない多階層のつながりの構築を目指す。
- ・「線引き」を決めるための当事者グループワークを繰り返す。

7

波及効果

他団体への波及可能性

- ・「当事者の意思表示」「社会参加における能力存在推定」「当事者グループワーク」など、互助のコーディネートメソッドが少しずつ確立しつつある。

他団体へのメッセージ

- ・誰でも他人のために、地域のためになにか役に立つ力を必ず持っています。まずは、当事者（支援対象者）に「私たち困っているんです」って泣きついてみませんか？